

鉄 道

小野田 滋

1. 鉄道土木史の特徴

今年(1872(明治5)年)に鉄道開業して、ちょうど120年目の記念すべき年にあたる。この間、鉄道は近代文明の先兵として全国津々浦々に線路網を築き、わが国の産業・文化の発展に多大な貢献を果たしてきたが、戦後は道路網の整備や航空機の発達等により交通機関としての独占的地位を失い、かつてない厳しい環境下に置かれている。とは言え、大量高速輸送機関としての機能は依然として健在で、特にわが国のような稠密な人口を抱える国土には欠くべからざる存在となっている。

さて、このようにして年輪を重ねてきた鉄道の歴史は、また近代土木技術の歴史でもあった。山を削り、谷を埋め、橋梁を架設し、トンネルを掘る技術は、鉄道建設を通じて全国へと伝播し、近代土木技術の啓蒙、普及に寄与すること大であった。その特徴のいくつかを掲げると、下記のように要約することができる。

- 1) 鉄道網の伸展を通じて、土木工学の根幹を成す技術(測量、土工、橋梁、トンネルなど)を全国規模で展開し定着させたこと。
- 2) 明治以降の国家的プロジェクトとして、継続的かつ計画的に行われた公共投資の典型的事例であり、国および地域社会の発展に多大な影響を与えたこと。
- 3) その建設過程で請負業のシステムを確立し、建設業界の育成を図ったこと。
- 4) 機械、電気、通信、建築など、他の工学分野と密接な関わりを保ちつつ発展してきたこと。

こうした特徴は、研究対象としての鉄道が、様々な観点からアプローチすることが可能であることを示している。例えば1)を主眼に置くならば、全国各地に散在する構造物を、技術史的観点から調査することによって、その発達過程を明らかにすることが可能であり、2)を主眼に置くならば、社会資本の整備状況といった計画学的観点からアプローチすることが可能である。このような、多角的な切り口によるテーマの選択はこれまでの土木史論文にも顕著に現れており、いわゆる構造系の論文と計画系の論文が同じ土俵の中で混沌として存在しているのが鉄道土木史の特徴である。従って、前回発表された都市計画および橋梁のレビューと一部重複する部分もあるが、このような特殊性を配慮の上、御容赦願いたい。

2. 鉄道土木史研究のあゆみ

鉄道土木史に関する研究は、鉄道史の一部として比較的古くから行われていた。『本邦鉄道の社会及経済に及ぼせる影響(全3巻)』(鉄道院・1916)、『日本鉄道史(全3巻)』(鉄道省・1921)、『明治工業史・鉄道篇』(工学会・1926)、『鉄道技術発達史(全9巻)』(国鉄・1958~1959)、『日本鉄道請負業史(全3巻)』(鉄道建設業協会・1967, 1978, 1990)『日本国有鉄道百年史(全14巻+別巻5)』(国鉄・1969~1974)等の通史は、今や鉄道土木史を研究するにあたっての必読書となっている。また、「〇〇工事局〇年史」といった各現業機関ごとの年史類、「〇〇鉄道〇年史」といった民鉄の社史類にも数多くの土木史に関する記述が含まれており、このような年史、社史の編纂を通じた組織主導型の土木史研究がひとつの特徴でもある。

一方、個人レベルでの研究は、土木を含むいわゆる鉄道史としての研究がさかんに行われており、その裾野の広さも特徴である。これらの研究事例については枚挙にいとまがないため、ここでは具体的記述を省略するが、先頃刊行された『交通学説史の研究(そのIV)』(運輸経済研究センター・1991)には、交通法学、

交通地理学、交通史学、交通社会学といった分野の詳細なレビューが報告されており、鉄道土木史を考える上でも有益な示唆に富んだ文献となっている。こうした社会科学系の分野に比べて土木史的観点からのアプローチは依然として従来の「通史」的な見方に留まっていた観があり、個々の技術に対する評価や分析といった点では未だ発展途上の段階にあると言える。

3. 土木史研究発表会における鉄道

土木史研究発表会における鉄道に関わる研究は多岐にわたっているが、軌道、橋梁、トンネルといった個々の構造物を対象としてその沿革と現状を報告したもの、都市鉄道、地域鉄道などを題材として鉄道の発達過程とその開発効果を探ろうとしたもの、データベースなどを用いた研究手法の開発をテーマとしたものなどに分類される。このことは、鉄道が様々な視点からアプローチできる研究対象であることを示すひとつの証左でもある。ここでは第1回から第11回に至る発表論文の中から、鉄道をテーマとしたもののすべて、および鉄道にとって有益な情報を含むいくつかの論文について、その概要を紹介してみたい。

3.1 軌道構造

鉄道固有の構造とも言うべき軌道構造の研究は、西野保行、小西純一、淵上龍雄¹¹⁾による古レールの追跡調査により、輸入レールから国産化に至る過程がほぼ解明された。これまでの鉄道土木史は、既往文献に基づく演繹的研究手法による内容のものが多かったが、この研究では現存する個々の古レールを丹念に検証することにより帰納法的にその発達過程を解明した点に特色がある。

また、山本功、岡村康弘、上石俊之¹²⁾は加古川駅を中心とした古レールの分布状況についてレポートした。

3.2 橋梁

鉄道橋梁史に関する論文は、久保田敬一による『本邦鉄道橋梁の沿革に就て』（業務研究資料, Vol. 22, No. 2, 1934）、西村俊夫の『国鉄トラス橋総覧』（鉄道技術研究資料, Vol. 14, No. 12, 1957）という優れた既存研究があるが、西野保行、小西純一、淵上龍雄¹³⁾⁻¹⁵⁾はこれらの論文をベースとしながらも、個々の橋梁の履歴を現物と記録とを比較しながら丹念に検証することにより、明治期における鉄道用トラスの全容をほぼ明らかにした。このシリーズは、古レールにおいて行った研究手法をトラス橋に対して応用したもので、現物を追跡調査することにより過去の研究を新たな視点で見直し、いくつかの定説や俗説を改めた点で特筆される。また、その過程でわが国最初の鉄道用鉄製トラス橋が発見されたことは、大きな収穫であった¹¹⁾。

この他、石島孝志、篠田哲昭、大野和彦、早川寛志¹²⁾は支笏湖畔に架かるベッパロ橋を取上げ、鉄道橋としての特徴やその変遷について解明を行った。

国外の鉄道橋としては三浦基弘¹³⁾によるフォース鉄道橋の研究があり、その建設に日本人技術者、渡邊嘉一が関わっていた事実を明らかにした。

一方、鉄道用アーチ橋を対象とした研究事例もいくつかあり、伊東孝、土屋幸生¹⁴⁾は碓氷峠の周辺に残る歴史的構造物群を紹介した中で、碓氷峠のレンガアーチ橋と横川駅の跨線橋についてその歴史的文化的財としての意義を明らかにした。

市原久義、片寄紀雄、賛田秀世¹⁵⁾は、新たに発見された東京市街鉄道の高架橋の設計図面を基礎資料として、その沿革と現状について報告を行った。これらの成果はさらに島秀雄を中心としてまとめられ、パルツァーの中央停車場設計案と共に『東京駅誕生』（鹿島出版会・1991）と題して上梓された。

また、河村清春、小野田滋、木村哲雄、菊池保孝¹⁶⁾は、一部の鉄道用アーチ橋に見られる渦巻状の奇妙なレンガ積み構造に対して考察を加え、現地調査結果に基づき、その存在理由を明らかにした。

橋梁下部構造に関する研究は上部構造に比べて少ないが、平川脩士¹⁷⁾はニューマチックケーソン工法の歴史を解明した中で、朝鮮鉄道局鴨緑江橋梁での施工例に触れた。また、小野寺駿一¹⁸⁾は、スクリュールパイルによる橋梁基礎の歴史を振り返った中で、初期の鉄道橋梁におけるいくつかの事例について触れた。

この他、架設技術に関する研究として、小野田滋¹⁹⁾は操重車を用いた鉄道固有の橋梁架設法について、そ

の沿革を明らかにした。

3.3 トンネル

トンネルは橋梁に比べて外観上の特徴に乏しく、どちらかと言えば施工法やルート選定といった観点から捉えられる機会が多かったが、伊東孝、土屋幸生の前掲論文¹⁴⁾は、景観工学的見地から碓氷峠のトンネル群について考察を加えた。

これに対して、小野田滋、司城能治郎、永井彰、菊池保孝、山田稔、井上和彦、松岡義幸^{20)~22)}は古レールや橋梁の調査で西野らが用いた研究手法をトンネルに応用し、関西地方の路線を中心として各線区ごとにその個々の特徴と沿革を網羅的に検証した。

3.4 駅前広場・停車場

駅前広場や停車場に関する研究は、これまで建築分野でいくつかなされてきたが、土木史的観点での研究事例は意外と少ない。

榛沢芳雄、為国孝敏²³⁾は都市計画と駅前広場の関わりについて、東京における沿革を調査した上でその評価を試みた。さらに、為国、榛沢²⁴⁾は、渋谷駅を具体例として、駅空間の変遷について考察を行った。

また、古田崇、天野光一²⁵⁾は、駅前広場の設計思想を再整理し、その変遷について様々な角度から時代区分を試みた。

停車場そのものに関する研究として、鈴木正章²⁶⁾は東京中央停車場が高架駅となった経緯を、古市公威との関わりから考察した。

また、丹羽俊彦²⁷⁾は、東京駅を対象として、その開業から現在に至るまでの経緯を調査し、輸送量の増大に伴う駅改良の変遷史について考察した。

3.5 都市鉄道

鉄道は道路とともに都市機能を維持するための欠くべからざる「装置」であり、その過去を土木史的観点から省みることは、将来の計画を策定する上でも重要である。

君島光夫²⁸⁾は、営団地下鉄銀座線を対象として、東京地下鉄道と東京高速鉄道により建設された経緯から営団設立までの沿革を明らかにし、その特徴について考察した。君島²⁹⁾はさらに、1889（明治22）年の市区改正計画から1925（大正14）年の高速鉄道速成委員会報告に至る東京の高速鉄道網計画を時系列的に把握し、現在の路線網と対比させた。

また、入江平門、西村聡³⁰⁾は、これまでの地下鉄道の整備状況を振り返り、その制度、思想的背景の変遷について考察を行った。

一方、路面電車に関する研究は、新谷洋二、松谷春敏³¹⁾による横浜市電を対象とした研究が唯一の事例で、その建設から繁栄、衰退に至る経緯を調査し、全廃に至った原因を様々な角度から考察した。

この他、松原淳、山川仁³²⁾は戦前の東京圏において民鉄が行ってきた沿線開発について、学園都市の形成という観点で解明した。

また、藤原康雄、奥野博久、松岡義幸、萱原瑞穂³³⁾は、大阪環状線の成立過程について、その沿革を紹介した。

3.6 地域鉄道

ある特定の地域や沿線を対象とした鉄道史研究は、青木栄一により「メソスケールの鉄道史」として位置付けられ（青木栄一『メソスケールの鉄道史に関する考察』東京学芸大学紀要, 第3部門, No. 37, 1985）、主として交通地理学の分野で行われてきたが、土木史でも類似のアプローチによる論文がいくつか発表されている。

堂柿栄輔、佐藤馨一、五十嵐日出夫³⁴⁾は、明治期における札幌周辺の鉄道網の変遷とその経緯を解明した。

天野光三、前田泰敬、二十軒起夫^{35)~36)}は東大阪地域における鉄道を中心として、舟運、道路網を含めた地域交通と地域社会の関わりについて考察を加えた。

また、稲葉克己、渡辺貴介³⁷⁾は“観光関連鉄道”というユニークな概念に基づき、関東圏における観光を目的とした鉄道の分類を試みた。

同様に、天野光三、前田泰敬、二十軒起夫³⁸⁾は“寺社参詣鉄道”という概念で、関西圏における沿革とその将来について考察を行った。

この他、新谷洋二、堤佳代³⁹⁾は、鉄道が導入されることによる旧城下町の変容過程を調査し、個々の都市でその後の発展に差異が生じた原因について考察を行った。

3.7 研究手法

鉄道土木史の研究方法は、文献調査と現地調査が主流を占め、統計学的評価手段の適用例は意外に乏しい。こうした中で、森杉壽芳、橋本有司⁴⁰⁾は明治期における鉄道の与えた開発効果を定量的に評価するため重回帰分析を応用し、GNPに占める割合を検証した。この研究はその後継続して行われ、森杉、林山泰久により『明治・大正期鉄道網形成の社会便益』として土木学会論文報告集(No. 440/IV-16, 1992)に発表された。

データベースの構築はいくつかの研究事例があり、中岡良司、森弘、佐藤馨一、五十嵐日出夫⁴¹⁾は時間距離を調査する手段としてリレーショナル型データベースを用い、海運、道路を含めたその変遷を明らかにした。

また、窪田陽一、野田裕志⁴²⁾は、鉄道路線を基礎データとした地図型データベースを構築し、多角的に検索できる機能を付加させた。さらに、窪田、長束裕行⁴³⁾は、埼玉県下の鉄道駅と橋梁を対象として地図型データベースを構築し、その作成上の問題点と将来性について考察を行った。

鉄道土木史を研究する上で方法論を本格的に述べた論文はまだないが、馬場俊介、二宮公紀、三島康生⁴⁴⁾は土木史研究の方法論について考察した中で、鉄道土木史研究の特徴について触れた。

3.8 その他

鈴木哲、大熊孝、米内弘明、桐生三男⁴⁵⁾は除雪技術の変遷を調査した中で、国鉄による大規模な流雪溝開発の経緯について触れた。

篠田哲昭、中尾務、早川寛志⁴⁶⁾は、幕末から明治期にかけての茅沼炭山の石炭輸送を調査し、わが国最初と言われる鉄軌道による輸送方式の具体的構造等を解明した。

鉄道の組織を対象とした研究としては、小野田滋⁴⁷⁾による鉄道省における地質調査業務の定着過程に関する論文があり、黎明期から鉄道省土質調査委員会の成立までの経緯を明らかにするとともに、この分野において鉄道が先駆的役割を果たしていたことを解明した。

また、鈴木恒夫⁴⁸⁾は、国鉄からJRへ移行した際の組織の変革について述べた。

4. 他の分野における研究動向

鉄道史に関する研究は、冒頭でも記したように、他の学問分野でも幅広く行われており、土木史と関わり深い研究も数多くなされている。その研究レビューは、道路、港湾、空港を含め、先に紹介した『交通学説史の研究(そのIV)』所載の山口真広『交通法学の展開とその系譜』、青木栄一ほか『交通地理学の展開とその系譜』、『交通史学の展開とその系譜』、角本良平『交通社会学の展開とその系譜』に詳しく紹介されているので、この方面に関心のある方は是非一読されることをお勧めしたい。

また、鉄道事業者による組織的な土木史研究は、先に述べたように社史や年史の編纂を通じて行われるケースが多く、ことに国鉄からJRに至る過程ではいくつかの年史類が発行された。これらは、新事業者移行前の集大成を行うべく、各事業所ごとの企画により出版されたものであったが、人的にも予算的にも余裕がなかったためか、いずれも過去の年史類に比べて浅薄な感が否めなかったのは惜しまれる。

一方、土木史に関係のある一般書籍を硬軟含めて紹介すると、守田久盛・福田光雄・大八木正夫『鉄道路線変せん史探訪—パートⅢ—』(吉井書店・1982)、藤井浩『切手に見る鉄道技術の歴史』(土木工学社・

1983)、西野保行『鉄道史見てある記』(吉井書店・1984)、佐藤博之・浅香勝輔『民営鉄道の歴史がある景観Ⅰ』(古今書院・1986)『同・Ⅱ』(同・1988)、武知京三『都市近郊鉄道の史的展開』(日本経済評論社・1986)、田村喜子『北海道浪漫鉄道』(新潮社・1986)、菅建彦『英雄時代の鉄道技師たち―技術の源流をイギリスにさぐる―』(山海堂・1987)、小川功『民間活力による社会資本整備』(鹿島出版会・1987)、原田勝正『鉄道史研究序論―近代化における技術と社会―』(日本経済評論社・1989)、守田久盛・神谷牧夫『鉄道路線変せん史探訪Ⅳ―九州の鉄道100年―』(吉井書店・1989)、島秀雄編『東京駅誕生―お雇い外国人バルツァーの論文発見―』(鹿島出版会・1990)、J R 東日本歴史的建造物調査委員会編『BRIDGES AND TUNNELS―J R 東日本の歴史的建造物―』(J R 東日本・1990)、田村喜子『剛毅木訥―鉄道技師藤井松太郎の生涯―』(毎日新聞社・1990)、武知京三『日本の地方鉄道網形成史―鉄道建設と地域社会―』(柏書房・1990)などがこの10年間ににおける主な収穫である。しかし、これらの大半は土木技術者以外による著作であり、鉄道土木史への関心を促す意味でも、今後一般向けの良書が土木史の専門家によって著されることを期待したい。

最後に、鉄道土木史と関連する学会組織としては、1977(昭和52)年に設立された産業考古学会と、1985(昭和60)年に設立された鉄道史学会があり、それぞれ独自の立場で活動を行っている。産業考古学会は過去のものとなりつつある産業設備や施設を文化遺産としてとらえ、その調査・保存・記録を行う目的で設立された学会で、鉄道関係の諸施設も対象として含まれている。その成果については、会誌である『産業考古学』に随時報告が行われている。これに対して鉄道史学会は、文科系、技術系にまたがる様々な学問分野を「鉄道」というキーワードで結びつける学際的色彩の濃い組織として発足したもので、その会誌『鉄道史学』には、様々な立場からの研究の方法論、研究成果等が報告されている。

5. 今後の展望

これまで繰返し述べてきたように、鉄道土木史は様々な分野からのアプローチが可能であり、純構造的な分野を除けば他の学問分野との境界も明瞭ではない。こうした状況の中で土木史に求められているものは、やはり土木工学的観点に基づく鉄道の評価・解釈であり、ここに従来の鉄道史にはない土木史としての独自性を主張する根拠があると言える。

今後、鉄道土木史として取組むべき研究テーマのひとつとしては、歴史的構造物の実態把握がある。前回の橋梁編でも指摘されたように、体系的かつ網羅的な研究に基づいてこれらの調査・保存・記録を行っておくことは、現物が次々と失われる中で焦眉の急である。これまでのところ、鉄道用トラス橋に関してはほぼその全貌が解明され、また鋼橋に関しては土木学会鋼構造委員会に歴史的鋼橋調査小委員会が組織されて活動を行っているが、それ以外の土木構造物については一部を除いて実態把握すらなされていないのが実状である。これらの調査は個人レベルでは到底不可能に近いだけに、鉄道事業者の協力のもとに組織的かつ系統的な研究の進展が望まれるところである。

一方、計画系の分野では、今後も地域鉄道や都市鉄道を対象とした研究がさかに行われるであろうと予測されるが、先述のようにこの分野ではすでに社会科学系の分野が先鞭をつけており、土木史的観点に基づく独自性をいかに主張するかが発展の鍵となるであろう。ことに鉄道側から見た都市計画と鉄道との関わり、駅前広場や連続立体交差事業における鉄道事業者と自治体との関係、地域社会に与えた鉄道のインパクトなどについて、土木史的観点から系統的に取組んだ研究事例はまだ数少なく、様々な分野と連携を図りつつ、より研究が深度化されることを望みたい。

本稿では、土木史研究発表会の活動を中心として鉄道土木史の研究動向を概観したが、鉄道土木史で扱わなければならない題材はまだまだ数多く存在し、今後もユニークな視座による独自の研究が登場することを期待する次第である。

鉄道土木史関係論文リスト

「土木史研究」1～11(1980～1991)

1. 軌道構造

No.	著者：「タイトル」	回	ページ	年
1)	西野保行・小西純一・淵上龍雄： 「日本における鉄道用レールの変遷－残存する現物の確認による追跡－」	2	30～37	1982
2)	西野保行・小西純一・淵上龍雄： 「日本における鉄道用レールの変遷－残存する現物の確認による追跡（第2報）－」	3	126～135	1983
3)	山本功・岡村康弘・上石俊之： 「加古川周辺における古レール使用鉄道構造物」	10	263～266	1990

2. 橋梁

No.	著者：「タイトル」	回	ページ	年
4)	小西純一・西野保行・淵上龍雄： 「明治時代に製作された鉄道トラス橋の歴史と現状（第1報）－200フィートダブルワーレントラスを中心として－」	5	207～214	1985
5)	西野保行・小西純一・淵上龍雄： 「明治時代に製作された鉄道トラス橋の歴史と現状（第2報）－英国系トラスその2－」	6	48～57	1986
6)	小西純一・西野保行・淵上龍雄： 「明治時代に製作された鉄道トラス橋の歴史と現状（第3報）－ドイツ系トラス桁－」	7	199～206	1987
7)	小西純一・西野保行・淵上龍雄： 「明治時代に製作された鉄道トラス橋の歴史と現状（第4報）－米国系トラス桁その1－」	8	134～141	1988
8)	小西純一・西野保行・淵上龍雄： 「明治時代に製作された鉄道トラス橋の歴史と現状（第5報）－米国系トラス桁その2－」	9	227～238	1989
9)	小西純一・西野保行・淵上龍雄： 「わが国における英国系鉄道トラス桁の歴史」	10	53～64	1990
10)	小西純一・西野保行・淵上龍雄： 「明治時代に製作された鉄道トラス橋の歴史と現状（第6報）－国内設計桁－」	11	131～142	1991
11)	西野保行・小西純一： 「現存するわが国最初の鉄道用鉄桁－70ftボニーワーレントラス－」	7	193～198	1987
12)	石島孝志・篠田哲昭・大野和彦・早川寛志： 「湖畔橋（ベッパロ橋）」	9	239～244	1989
13)	三浦基弘： 「フォース橋と渡邊嘉一（その1）－埋もれていた明治のある技術者の業績－」	2	48～51	1982
14)	伊東孝・土屋幸正： 「信越線横川駅跨線橋の保存対策と碓氷線に残る歴史的土木構造物群－その現状と土木史的価値検討の試み－」	5	215～221	1985
15)	市原久義・片寄紀雄・賛田秀世： 「東京市街線鉄道高架橋の設計」	10	65～74	1990
16)	河村清春・小野田滋・木村哲雄・菊池保孝： 「関西地方の鉄道における「斜架拱」の分布とその技法に関する研究」	10	199～210	1990
17)	平川脩士： 「わが国におけるニューマチックケーソン工法の歴史（その1）」	2	52～54	1982
18)	小野寺駿一： 「或るスクリュールパイルシューの歴史について」	8	32～39	1988
19)	小野田滋： 「橋梁架設用操重車ソ1形の歴史」	6	115～122	1986

3. トンネル

No.	著者：「タイトル」	回	ページ	年
20)	小野田滋： 「わが国における鉄道トンネルの沿革と現状－旧・関西鉄道をめぐって－」	8	113～124	1988
21)	小野田滋・司城能治郎・永井彰・菊池保孝： 「わが国における鉄道トンネルの沿革と現状（第2報）－旧・京都鉄道、旧・阪鶴鉄道をめぐって－」	9	245～254	1989
22)	小野田滋・山田稔・井上和彦・松岡義幸： 「わが国における鉄道トンネルの沿革と現状（第3報）－旧・官設鉄道長浜～神戸間をめぐって－」	10	211～222	1990

4. 駅前広場・停車場

No.	著者：「タイトル」	回	ページ	年
23)	榛沢芳雄・為国孝敏： 「東京の駅前広場計画の変遷－明治時代から戦災復興期まで－」	9	201～208	1989
24)	為国孝敏・榛沢芳雄： 「渋谷の駅空間形成の変遷」	10	289～297	1990
25)	古田崇・天野光一： 「駅前広場空間の設計思想及び手法に関する史的考察」	10	277～287	1990
26)	鈴木正章： 「古市公威と東京停車場」	8	20～25	1988
27)	丹羽俊彦： 「東京駅における鉄道輸送機能の発達」	10	267～275	1990

5. 都市鉄道

No.	著者：「タイトル」	回	ページ	年
28)	君島光夫： 「東京における黎明期の地下鉄づくりに対する史的考察」	2	9～20	1982
29)	君島光夫： 「東京における都市高速鉄道網計画の変遷に関する史的考察」	3	143～154	1983
30)	入江平門・西村聡： 「意識構造変化と地下鉄路線計画の歴史的発展過程」	10	255～262	1990
31)	新谷洋二・松谷春敏： 「横浜における路面電車の役割の変遷に関する考察」	2	21～29	1982
32)	松原淳・山川仁： 「戦前の東京圏における民営鉄道による沿線開発と学園町の形成」	6	250～257	1986
33)	藤原康雄・奥野博久・松岡義幸・萱原瑞穂： 「JR大阪環状線のルーツをさぐる－環運転30周年－」	11	191～196	1991

6. 地域鉄道

No.	著者：「タイトル」	回	ページ	年
34)	堂柿栄輔・佐藤馨一・五十嵐日出夫： 「明治開拓期における札幌の交通」	4	99～105	1984
35)	天野光三・前田泰敬・二十軒起夫： 「東大阪地域における鉄道網の発展過程について」	4	115～124	1984
36)	天野光三・前田泰敬・二十軒起夫： 「東大阪地域における鉄道網の発展過程について（その2）」	5	197～205	1985
37)	稲葉克己・渡辺貴介： 「戦前の関東圏における観光関連鉄道路線の展開と誘客策に関する研究」	6	98～102	1986
38)	天野光三・前田泰敬・二十軒起夫： 「関西地方における寺社参詣鉄道の成立と発展について」	8	88～95	1988
39)	新谷洋二・堤佳代： 「旧城下町における鉄道の導入とその後の町の変容に関する研究」	7	113～119	1987

7. 研究手法

No.	著者：「タイトル」	回	ページ	年
40)	森杉寿芳・橋本有司： 「明治期鉄道網形成の開発効果の測定」	3	136～142	1983
41)	中岡良司・森弘・佐藤馨一・五十嵐日出夫： 「交通路の発達による時間距離の変遷についてーリレーショナル・データベースを用いてー」	6	76～84	1986
42)	窪田陽一・野田裕志： 「地図型土木史データベースの作成に関する一考察ー鉄道路線データについてー」	9	33～39	1989
43)	窪田陽一・長束裕行： 「鉄道施設に関する地図型土木史データベース検索システムの開発ー駅及び橋梁についてー」	10	123～130	1990
44)	馬場俊介・二宮公紀・三島康生： 「土木史研究の方法論についての一考察」	9	55～62	1989

8. その他

No.	著者：「タイトル」	回	ページ	年
45)	鈴木哲・大熊孝・米内弘明・桐生三男： 「除雪技術の変遷に関する研究ー主として流雪溝についてー」	3	155～163	1983
46)	篠田哲昭・中尾努・早川寛志： 「幕末・明治期における茅沼炭山の石炭輸送について」	11	183～190	1991
47)	小野田滋： 「国有鉄道における地質調査の黎明と発展ー鉄道省土質調査委員会前史ー」	7	23～33	1987
48)	鈴木恒夫： 「国有鉄道からJRへ」	10	131～135	1990